

5 パネルディスカッション 「琵琶湖の未来」を考えよう！

○ パネリスト

上田 洋平 (滋賀県立大学環境学部助教)
高杉 昭吾 (高杉昭吾デザイン事務所代表)
酒井 洋一郎 (京都大学生態学研究センター研究員)
佐藤 祐一 (センター 主任研究員)
※()内は、開催時の所属になります。

○ コーディネーター 内藤 正明 (センター長)

内藤：“琵琶湖の未来”がテーマとなっていますが、琵琶湖を取り巻く社会全体、いわゆる集水域や流域の滋賀県の生活や社会を抜きにして琵琶湖はありませんので、琵琶湖とその周りを一体として議論をしていただくことをお願いしておきたいと思います。

まず、未来を語るにはまずは過去ということで、もう一度、滋賀の社会とはどのようなものであったかを簡単に振り返って頂きたい。

これに上田さんの屏風がとっても参考になると思います。

上田：私は今、まちづくりの観点から集落のお年寄りたちからお話を聞き、それを若い人達と一緒に絵にする活動をしております。

絵屏風は、滋賀県の県立大学があります八坂町のお年寄りの話を聞いて絵にしたものです。

絵屏風の中では、浜の端でおばさんがしゃがんでお櫃を洗つておあり、お櫃の米粒に寄ってきた魚を捕つて、持つて帰つて食べます。また、水浴びしながら貝をたくさん採つておあります。その後ろの砂浜で特産のらっきょうを育て、それを汀で洗つています。その横では流れてきた木を拾い、風呂やかまどで使う燃料としています。

これを子どもたちに何をしているか尋ねると「ゴミ拾いだ」と言い、一方、おじいさん達は「焚きもん拾い」とおっしゃるわけです。

今の私たちには、かつて「恵み」だった流木がただの「ゴミ」にしか見えない。このような暮らしになっており、これを転換させていくことが大事かなあと思います。

この活動を私は「過去を育てて未来をつくる」と言っております。



酒井：私は人間活動、例えば、栄養塩の流入や農業活動による濁水の流入、温暖化などが琵琶湖の環境や水質、生物多様性に与える影響について研究しております。



その中にある昔の人の暮らしという中で、1つ研究例を紹介させていただきます。

農業濁水が琵琶湖に流入した結果、沿岸環境が悪化し、また、沿岸の湖底環境も悪化し、さらには生物多様性も低下するとの研究事例があります。昔は、田んぼで使った水をまた田んぼに戻し、濁水が入らないようにして琵琶湖に流すといつながらりがあったと言われています。このような環境が非常に参考になると考えています。

高杉：私はデザイナーですが、デザインは色々、複雑なものから特徴を捉え、そこを特に目立たせることで物を理解してもらいます。滋賀県クリエイターズ協会が主催したショーに、鮎寿司のポスターを出して最優秀賞を頂きました。鮎寿司はすごく臭いからなかなか食べられない方が多いのですが、そのポスターをつくる時に臭いにあえて注目して、「臭いからおいしいんだ」という方向にもつけていくことで、欠点の部分を長所に変えていく方法で制作しました。

内藤：ありがとうございます。今のお話の中ですごく印象深いのは、欠点と長所ということです。昔の社会はとても懐かしくて良いということは、裏返せば、飢えて貧しいような社会であることも確かではないかと思います。

それを悪いと見るか、欠点こそが長所に変わると見るのは、この評価の仕方が立場で色々と変わってくることを含めて話していただいて結構なので佐藤さん、お願いします。

佐藤：個人的な印象としての話になるかもしれませんのが、昔の価値観や豊かさを良いと思う方もそれはそれでよいと思いますが、その価値観を人に押し付ける、人に強いるのは違うと思います。

また、今までやってはこなかったけれども、実はやってみたら、すごくおもしろかったということは、たくさんあると思っています。そのような選択肢がないことが今、問題になっていると思います。

内藤：“懐かしき未来”に対してもう一つの対極があるのが、“輝ける未来”。これは科学技術が進んで、豊かになり、便利になり、ますます新しいことができるようになる豊かな未来です。この2つを滋賀・琵琶湖ではどのように考えていけば良いかを議論していただきたいと思います。まず、上田さん。

上田：過去を育てて未来をつくるというのは、必ずしも、

現在の琵琶湖の湖岸類型



図2. 現在の琵琶湖の湖岸類型 (金子, 2011)

また北湖では自然湖岸が4分の3を占めていましたが、南湖では僅か4分の1で人工湖岸が4分の3もあり、自然湖岸と人工湖岸の割合が逆転していました。北湖と南湖では、湖岸変化の現状は大きく異なっているのです。

「琵琶湖の砂浜の変化」

次に北湖湖岸の4割近くを占める砂浜に注目してみます。100年前と現在を比較しますと、安曇川デルタと姉川デルタを除き、ほとんどの湖岸が砂浜（または岩石・礫浜）であつたことが分かります。その後、愛知川河口など一部の湖岸を除き、多くの湖岸で著しく砂浜が減少しました。

水産試験場が湖内の底質を調査したデータがあります。1969年、1995年、2003年に水深0mから7mで泥を採取して調べたところ、沿岸帶の湖底でも、粗い砂の割合が減少し、細かい泥の割合が増えています（図3）。

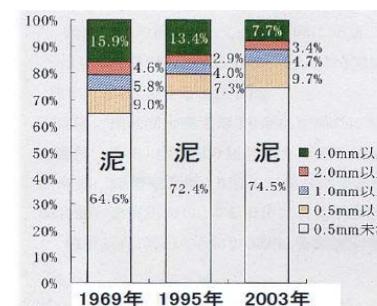


図3. 琵琶湖沿岸帯の底質変化(滋賀県水産試験場, 2005)

なぜ砂浜ができるのかですが、波浪エネルギーの調査結果をみると、波浪が強い地域に砂浜湖岸が広がっています。彦根から多景島の辺りでは、波が非常に荒く、湖底の石が洗われて砂や礫になつたりしています。

一方、内湖の湖底の多くは泥地です。季節風が強い冬でも、内湖にはほとんど風がありません。いいかえると、風波の強い琵琶湖と穏やかな内湖とのコントラストが、琵琶湖とその周辺の自然をつくりだしていると考えられます。

穏やかな内湖(左)と波浪の強い北湖(右)



写真1. 北湖東岸の航空写真 (彦根より南側をのぞむ)

「砂浜とセタシジミ」

では砂浜に固有の生き物は何でしょうか？陸上では、ハマヒルガオのような海浜植物があげられます。水中では、大湖沼としての琵琶湖に特有な生きものはセタシジミとカワニナ類でしょう。

実際、1960年代に滋賀大学の林一正先生が調査したところ、シジミ類は季節を問わず砂や砂泥に生息していました。シジミは砂質の湖底を代表する生き物といえます。

シジミ類の現存量は1953年には琵琶湖全域で1万2千トンほどでしたが、今は1千トン前後です。減少理由の一つは、1960年代の集中豪雨で大量の除草剤が琵琶湖に流れ込んだことやその後の乱獲が原因とされていますが、それだけでなく砂地が減ったことも影響している、と私は考えています。

「琵琶湖の未来」

琵琶湖は内湖など湿地帯が広がるとともに、砂浜、礫浜、岩石浜が広がる湖でもありました。

近年、内湖の生態的機能が注目されています。ヨシ群落保全条例をはじめとして、そのような視点で琵琶湖周辺の湿地帯を保全することは非常に重要です。一方、琵琶湖のもう一つの特性である大湖沼や古代湖としての視点については、これまで十分認識されることはありませんでした。

約30年前に京都大学の森主一先生が「南湖にセタシジミを取り戻そう！」というお話をされていました。自分なりに森先生のお考えを推測すると、これは南湖に砂浜を取り戻そうという意味ではなかったかと思います。その意味でも、今後は砂浜や砂地をどのように保全すればよいかを考えいく必要があると強く思います。

以上、内湖と砂浜の両方を保全することが、琵琶湖本来の姿を生かすことに繋がり、そのことが琵琶湖そのものの未来に繋がっていくという話をさせていただきました。

皆さま、長い間ご清聴いただき、有難うございました。